日本漢文小說叢刊

第一輯

筆記叢談類三

王三慶　莊雅州
陳慶浩　內山知也　主編

臺灣學生書局印行

王三慶　莊雅州
陳慶浩　內山知也　主編

日本漢文小說叢刊

第一輯　第三冊

筆記叢談類三

談叢

淞北夜譚

大東世語

國立中正大學語言與文學研究中心
國立成功大學中國文學系
日本財團法人斯文會　出版
法國科研中心中國文化研究所
蔣經國國際學術交流基金會　贊助

《日本漢文小說叢刊》第一輯

第三冊　目錄

筆記叢談三

談叢　1
淞北夜譚　263
大東世語　349

筆記叢談三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

談

叢

《談叢》中文出版說明

本書共二卷二冊，活字排版早稻田大學藏本。首封面，題「《談叢》卷一」，有明治三十二年己亥（西元一八九九年）十月門人岡崎壯識〈凡例〉五則。隨後為卷一目錄，首行題：「《談叢》卷一」，次行題：「依田百川學海著」，雙邊無界。正文每頁十四行，行三十二字，雜有訓點，欄上有眉批，篇末有總批。卷一末有杉山令跋語一篇，談到學海身懷大志，既負不羈之才，卻因宦場蹉跎，罷官家居，於是發憤著述諸書，借副墨以吐露，亦如馬遷涑水之意。封底有著作權頁，為明治三十三年九月十五日吉川印刷工場印刷諸文字及該書售價。又卷二亦有土星弘敘文，信夫粲跋語各一篇，文意與卷一序跋大同小異。

至於〈凡例〉文中提到學海先生喜誦《史記》，為文長於敘事，曾經輯錄近世異聞奇事的四卷《譚海》行世，今再就稿中鈔出後來新作，間雜紀行，由於二者體例不同，所以改其題目，稱之為《談叢》。紀傳中有親友故舊囑者，文稍異體，據實撰錄之筆法則一。又圈點評閱諸家多人，已不復識別。末附〈依田家傳〉、〈依田柴浦先生傳〉及〈依田百川自傳〉，蓋依〈太史公自序〉體例，可見其受《史記》一書之深遠影響。

〈凡例〉之後則為庚子年大槻修撰寫的〈引〉言，其中談到學海六十七歲時，遺言託其刊印《談叢》一稿事，對於時人視漢文如土芥，又唱國字改良論，置國語調查會，以漢文為縵為縟，

直愈棄置而後已，殊未解漢文之與日本國文如兄如弟，緊密一體。蓋日本語文兼字與語，論其結構章法不得不取準漢文，是不熟漢文，則日本國文不能妙也，甚至置文辭於度外，則下筆頓失精神，文歸死物。這點正反映明治維新之後，歷經中日甲午戰爭，日本知識分子一般轉向西學，而中國文化也隨著晚清國力的積弱而逐漸衰退，中國在日本人的眼光當中已不知視為何物矣。

依田氏幼名幸造，長名朝宗，其師藤森天山為之取號學海，又有百川、贅庵、柳蔭等號，舊稱七郎，又右衛門二郎，佐倉人（下總、今東京千葉縣）人。天保四年（西元一八三三年）十一月二十四日生。幼時受學於藩校，長從藤森弘庵受經史，兼修文辭。藩侯堀田正睦舉為中士，補藩學都講。安政六年（西元一八五九年），學海建言振興學政，激勵士氣。又建言正藩士風俗及息養人民二策。藩侯嘗廣求直言，學海疏陳弊政二十餘條。文久三年（西元一八六三年）三月，為侍讀兼近侍。四月，為郡方代官。學海就任，部民依例為致贈遺，皆命家人謝絕一切。其在職也，理民事，釋冤橫，大著政績。此年，水戶人多唱說攘夷者，其中藉言攘夷而嘯集兇徒，擾亂民家者。曾有水戶人長谷川勝七至佐倉借軍糧，藩吏大恐，命宰臣、學海及續豐德應接。學海、豐德與勝七面見辯論，詰問擅興兵馬，騷擾所在，非人臣之禮，勝七辭屈逃去。十二月，水戶人岡部義孚、前木正明率其黨二十餘人至藩領成田村，脅迫富家，募集軍資。學海往會見，說以義理，若有不聽者斬之。義孚等見其狀不可而引去，居三十餘日，兇徒復入部內。

元治元年（西元一八六四年）春，學海建議曰：「藩邑在他州置鄉兵，以備非常。」藩納其議，學海兼鄉兵頭，武藏國埼玉橫見之巡視二郡募集鄉兵，練習執銃。九月，與同僚協議辭職。後移住江戶，廣交諸有志者，將朝野事情多報與藩侯。同三年二月，拔擢為江戶留守居役。學海受命決心曰：「國家多難，最重使命，請以死當之。」明治元年（西元一八六八年）正月，發生伏

見事變，江戶在邸諸藩士集會共謀德川氏之為，學海協力說服舊誼，大力主張應採強硬措施，事不行。二月，藩侯與同志謀，為前將軍之行為謝罪。使藩老倉次重亨，學海為副上京。三月，至京，上書請太政官解救，不報。是月，藩侯上京，朝廷責其延遲，閒居待命。藩老佐治延平議重亨，學海屢屢上書明無他意。六月，學海補為公務員，尚留於議政對策。時朝廷大革弊政，學海上書輔相岩倉具視，論陳今言廢門閥而門閥猶存，開言路而言路猶塞，又專用西南之士而不用東北之士，大失公平。學海歸東京，十一月進班大寄合。二年七月，為少參事，尋進權大參事。學海與大參事平野重久、西村茂樹謀議，改民政，定軍事。十二月，移住東京。十一年七月，任修史局三等修撰，尋任四等編修，又進三等。十四年，陞文部少書記官。十八年十二月，被命非職，尋特旨敘以正六位，爾來絕意仕途，專事著述漫遊。時大興文學，著少年才子稗史小說，根據西洋之說而語多鄙俚淫靡，學海所著一以勸善懲惡為主，世人譏其陳腐。學海毅然曰：「西洋小說主才後德，今之少年稍長年齡必定後悔。」明治四十二年（西元一八八八年）十一月二十七日歿，享年七十七，葬於東京市下谷區谷中墓地。學海為人沈毅，不妄屈於人，最善詩文，好讀小說，尤嗜好觀劇。著述凡有《芳野拾遺名歌譽》、《俠美人》、《譚海》、《話園》、《譚叢》、《學海日錄》及《吉野拾遺名歌譽》、《拾遺日連枝楠》、《政黨美談淑女操作》劇作腳本等作品。❶

本書有詩有文，有傳有記，然而其談則一。由於體例駁雜，非盡敘事，序文中也已點明交待與《譚海》屬性不同，今則全書排版，以存全書整體樣式。

【注】

❶ 要了解依田學海的家世生平可以參考《談叢》一書〈依田家傳〉、〈依田柴浦先生傳〉及〈依田百川自傳〉。本段文字則參閱佐藤義亮編纂兼發行《日本文學大辭典、附補遺、索引、年表》（昭和十年五月二十九日，新潮社第二回增刷）第一三二七—一三二九頁。又參見《新潮日本人名辭典》一八四□頁。又有關研究其人及著作的篇章凡有〈依田學海著作目錄〉（《藝術殿》二—一□、昭七），依田百川〈依田百川自傳〉（《談叢》二、吉川半七、明三三），昭和女子大近代文學研究室編《近代文學研究叢書一□》（同大學、昭三三），木淚修等編〈人與文學作品——現代文學講座一〉（明治書院、昭三六），玉林晴朗〈歌川真秀與依田學海〉（《浮世繪界》——三之九、昭十三），刀畔子〈紅葉山人與學海翁〉（《心之花》三□□、大十二），久松潛一〈「出版月評」與篁村學海的近世小說論〉（《書物展望》三—一一、昭八），越智治雄〈新文學胎動期的依田學海〉（《文學》三三—一□、昭四十），依田美狹古〈出自父百川的思想〉（《傳記》三—七、一二、四—二、四、昭十一—十二），依田美狹古〈天山先生與父百川〉（《傳記》三—一□、昭十一），金澤雄子〈文學遺蹟巡禮——日本文學篇九九——依田學海〉（《學苑》一三—一一、昭二六），〈依田學海翁〉（《太陽》一一—一、明三八），關良一〈依田學海的日記〉（《國文學解釋及教材的研究》九—一一、昭三九），協阪安治〈依田百川〉（《太陽》二—一·二、明二九），〈依田百川自傳〉（《女學雜志》三四□、明二六）等，可資參考。

《談叢》　日文出版説明

本書は計二巻二冊で、早稲田大学の所蔵本である。見返しは、『談叢』巻一と題されており、明治三十二年己亥（一八九九年）十月に門人の岡崎壮が記した「凡例」五則が有る。つづいて巻一目次が有り、第一行目に「『談叢』巻一」と題されている。次の行に「依田百川学海著」と題され、双辺には界が無い。本文は毎ページ十四行、一行三十二字からなり、訓点が付けられており、欄外上部に眉批が有り、篇末に総批が有る。巻一末に杉山令の跋文が有って、話は学海が大きな志を抱いていたことに及び、とらわれぬ才を背負っていたので、かえって役人としては蹉跌し、官をやめて家にこもり、そこで発憤して諸書を著述してゆき、墨汁にたくして吐露し、まるで司馬遷の意志のようだという。奥付に著作権のページがあり、明治三十三年九月十五日、吉川印刷工場が印刷したことと、本書の価格とが載っている。また巻二には、土屋弘（竹南）の序文と信夫粲（恕軒）の跋文が有り、文意は巻一の序跋とたいして変わらない。

「凡例」にて学海先生に話題がおよんでいる。先生は史記を誦するのが好きで、文を作ると叙事にすぐれ、かつて近世の異聞・奇事をおさめた『譚海』四巻を刊行した。今ふたたび原稿の中から抄出してきて新たにつくり、紀行もまじえた。両者の体裁が同じではないので、そこ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

で題目を改め、これを『談叢』と称した。伝記中には、親友や故郷の家族のことも有り、文はやや異質で、事実によって記録してゆく筆法にのっとっている。また諸々の人々を圏点を付けて評閲するものの、二度目には付けない。最後に「依田家伝」「伯兄柴浦先生伝」および「先生自伝」を附す。けだし「太史公自序」の体裁に拠ったのであろう。このことから、『史記』の影響を深く受けていることが分かる。

「凡例」の後については、庚子年に大槻修が書いた「引」言があり、その中で学海六十七歳時の話に触れられている。遺言にて『談叢』を刊行してくれるよう託したのは、当時の人々が漢文を塵芥のように見なすのに対してであった。当時の人々は国自改良論を唱え、国語調査会を設置した。漢文はすでに粗雑かつ侮辱をされて、いよいよ棄てられるだけという目にあっていた。漢文とは日本と兄弟のごとく緊密な関係である、ということが、まるっきり理解されずにいたのである。思うに、日本語の文は、字と語を兼ねており、文法の構成について言えば、漢文に準拠せざるを得ない。これが漢文に精熟していないと、日本語の文は絶妙ではなくなってしまうのである。甚だしきは文辞を度外視してしまうと、筆を下ろしたとたん精神を失い、文は死物へと帰すのである。この点は、まさしく明治維新の後を反映している。中日甲午戦争を経て、日本の知識分子は西洋学問へと転向していった。そうして中国文化も、清国末期の国力が著しく衰えるにつれて、しだいに衰退してゆき、中国は、日本人の眼中には既にとるに足らぬものと化していたのである。

本書には詩が有り、文が有り、伝が有り、記が有るが、しかしながら言及されるにあたっては、それら文体の内どれか一つによって綴られている。体裁が雑駁なので、ことごとくは叙事

を記しきっておらず、序文でも『譚海』とは属性が違うことを明らかにしている。いまはすべて活版で記して、すべての体裁を保存している。

（佐藤浩一・訳）

說夢

齋一

談叢凡例五則

一學海先生喜讀史記其於文最用力敍事著輯錄近世異聞奇事著譚海四卷久行於世今復就稿中鈔出爾後所作續譚二卷其改題者以體裁不同也

一譚海因以敍邪此篇雖以紀行蓋英雄豪傑名士美人與山水花月相映發可以快讀者心目

一紀傳中有係其親戚故舊輒著文稱異體而錄實直敍則一

一批圈皆評閱諸家所加今不復識別

一編末附以依田家傳伯兄榮浦先生傳及先生自傳蓋依太史公自序例

明治三十二年己亥十月　　門人　岡崎壯圖識

引

客歲訪學海翁。翁卒爾日。吾有遺言。待卿久矣。余色然未及應。日亟刊譚海。續著談叢。亦欲刊行同世。而世人覩漢文如土芥。加以吾齡六十又七。餘生無幾。欲屬卿以此遺稿耳。幸待死後傳之。余乃解頤曰。遺稿孰與存稿。印行之事。俟今日任其勞。唯先生則自爲隔世之人。翁喜掀髯曰。是生死肉骨也。於是。携去其稿。託之吉川書房。今茲七月刊成。示之翁。且曰。近來國字改良論起焉。國語調查會置焉。逐時趨勢之徒。直把漢文。爲漫爲綱。甚則欲廢棄之。不知國文雖由字與語。其結構布置。不得不取準漢文。夫源語五十四帖。稱爲國文最妙者。然　一條帝評之曰。是善諳熟日本紀者也。日本紀。文非漢乎。是知不熟漢文。則國文終不能妙也。願世之學者。往往陷溺所習。不省其他。如文辭。亦概置之度外。是以筆失精神。文竟歸死物。翁之此著。焉奔兎飛。雲湧波動。篇篇皆活。文之妙極矣。雖然。若死後行於世。則文雖活矣。翁何得如是觀。翁且謝且笑曰。如電若。真個活人。相共噱然。乃書爲引。

明治庚子孟秋懸日　　大槻修識

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com